



沖縄県石垣島初記録のクマノコハゼ

近藤秀明¹・来間太郎²・淀 太我³

Author & Article Info

¹ 三重大学生物資源学部 (津市)

524334@m.mie-u.ac.jp

² (横浜市)

asataro727@gmail.com

³ 三重大学大学院生物資源学研究科 (津市)

tyodo@bio.mie-u.ac.jp (corresponding author)

Received 17 September 2026

Revised 21 September 2026

Accepted 22 September 2026

Published 24 September 2026

DOI 10.34583/ichthy.71.0_29

Hideaki Kondo, Taro Kurima and Taiga Yodo. 2026. First record of *Dotsugobius bleekeri* (Gobiidae) from Ishigaki-jima island, Okinawa Prefecture, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 71: 29–32.

Abstract

A single specimen of *Dotsugobius bleekeri* (Popta, 1921) (Gobiidae) was collected from Ishigaki-jima island in the Yaeyama Islands, Ryukyu Islands, Okinawa Prefecture, Japan. In Japanese waters, this species has previously been recorded only from Kagoshima (Yaku-shima and Amami-oshima islands) and Okinawa (Okinawa-jima, Iriomote-jima, and Yonaguni-jima islands). Therefore, the specimen described herein represents the first record of *D. bleekeri* from Ishigaki-jima island.

クマノコハゼ *Dotsugobius bleekeri* (Popta, 1921) は河口から汽水域上端部に生息する小型のハゼ科魚類である (Shibukawa et al., 2014; 鈴木, 2021; 是枝ほか, 2026). 本種は西部太平洋および東インド洋の熱帯および亜熱帯地域に分布し, 日本国内においては屋久島, 奄美大島, 沖縄島, 西表島, および与那国島から報告されている (Shibukawa et al., 2014; Li and Chen, 2025; 是枝ほか, 2026).

2024 年 12 月 27 日に沖縄県石垣島でクマノコハゼが採集された. 本種は石垣島からの記録がなく, 本標本は石垣島における本種の初めての記録となるため, ここに報告する.

材料と方法

採集調査は 2024 年 12 月 27 日に沖縄県石垣島の名蔵湾

に注ぐ河川のマングローブ林において, 第 1 著者および第 2 著者を含む 4 名で手網を用いて行った. 採集個体は活きた状態で研究室に運搬し, 生時の体色等を観察後, 2-フェノキシエタノールで麻酔を施し, 展縮して生鮮状態の写真を撮影した. 標本は三重大学大学院生物資源学研究科魚類標本として登録した (FRLM 66905). 標本の計数・計測は Shibukawa et al. (2014) に従って行った. 頭部感覚管およびその開孔の名称は明仁親王 (1984) に従った. 標準体長は SL または体長と表記した. 計測はデジタルノギスを用いて 0.01 mm 単位まで行った. なお, 本調査地点において高い採集圧とそれに伴う環境負荷がかかることを懸念し, 本報告では詳細な調査地点の公表を控えた.

Dotsugobius bleekeri (Popta, 1921)

クマノコハゼ

(Fig. 1)

標本 1 個体, FRLM 66905, 30.3 mm SL, 沖縄県石垣島名蔵湾のマングローブ林, 水深約 0.6 m, 手網, 2024 年 12 月 27 日, 近藤秀明採集.

記載 計数形質: 背鰭鰭条数 VI-I, 8; 臀鰭鰭条数 I, 7; 胸鰭鰭条数 16; 腹鰭鰭条数 I, 5; 尾鰭分枝軟条数 17 (上葉 9, 下葉 8); 縦列鱗数 28; 横列鱗数 (臀鰭起部–第 1 背鰭基部 13, 臀鰭起部–第 2 背鰭基部 11, 第 2 背鰭起部–臀鰭基部 11); 背鰭前方鱗数 0; 腹鰭前方鱗数 1; 尾柄周囲鱗列数 12. 体長に対する各部位の百分率 (%): 頭長 31.2; 頭幅 20.9; 頭高 24.0; 吻長 9.1; 眼径 10.9; 両眼間隔 2.9; 項部幅 14.4; 顎長 13.8; 体高 (腹鰭起部 28.8, 臀鰭起部 26.4); 体幅 17.0; 背鰭前長 33.8; 腹鰭前長 33.0; 臀鰭前長 59.1; 尾柄長 25.7; 尾柄高 14.7; 第 1 背鰭基底長 23.5; 第 2 背鰭基底長 24.9; 臀鰭基底長 16.6; 第 1 背鰭第 1 棘長 17.5; 第 1 背鰭第 6 棘長 10.7; 第 1 背鰭最長棘長 18.7; 第 2 背鰭棘長 13.4; 第 2 背鰭第 1 分節鰭条長 16.1; 第 2 背鰭最長分節鰭条長 18.1; 臀鰭棘長 8.9; 臀鰭第 1 分節鰭条長 13.3; 胸鰭長 31.7; 腹鰭長 24.9; 尾鰭長 28.3.

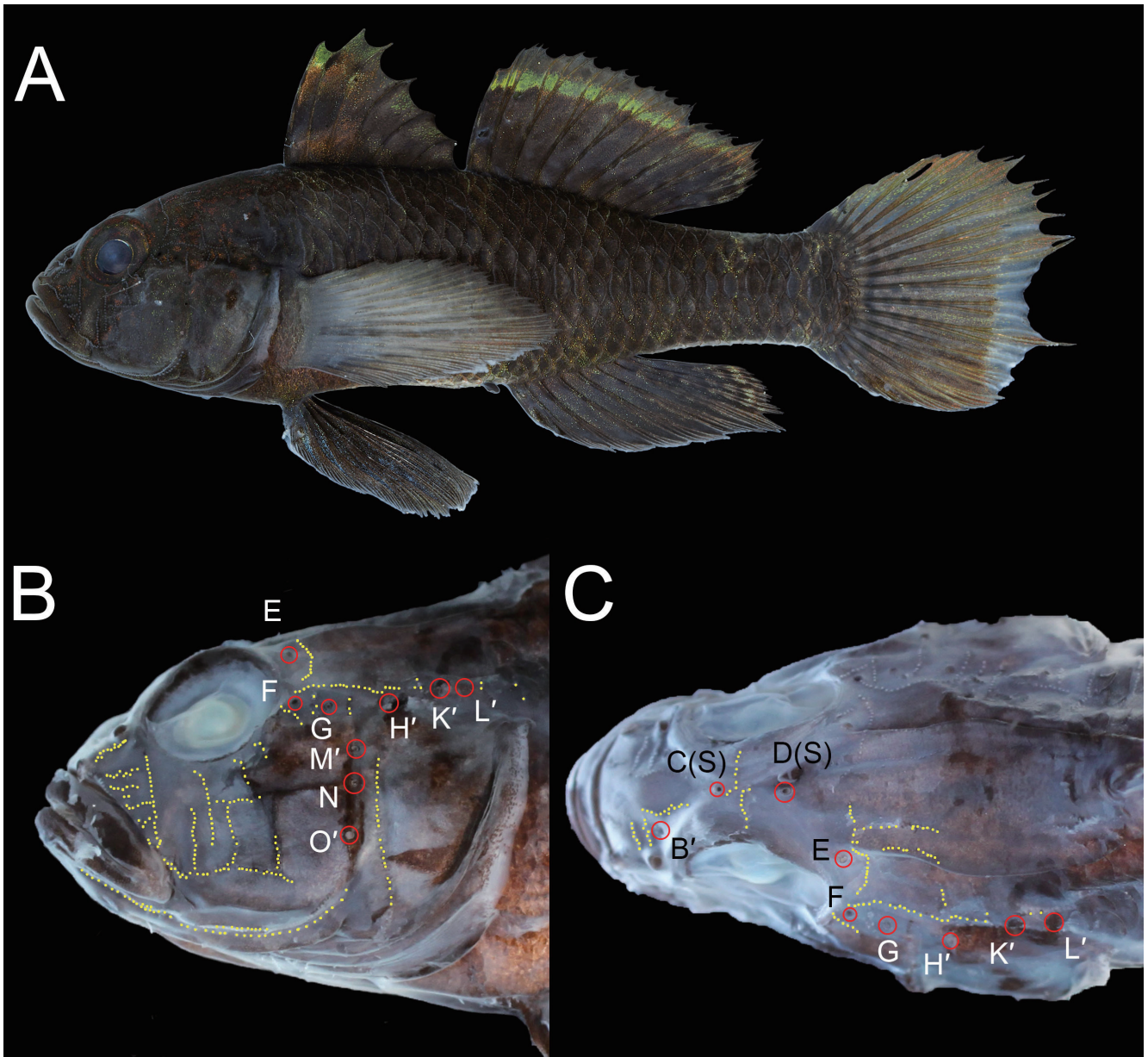


Fig. 1. Fresh and preserved specimen of *Dotsugobius bleekeri* (FRLM 66905, 30.3 mm SL) from the Ishigaki-jima island, Okinawa Prefecture, Japan: whole body of fresh specimen (A); lateral head of preserved specimen (B); dorsal head of preserved specimen (C). Red circles with uppercase letters indicate canal pores. Yellow dots indicate papillae.

体は太短く、側扁する。体高は背鰭第1棘基部付近で最大となり、体長の20.9%を示す。吻は短く、吻端はやや丸みを帯びる。口は端位で下顎は上顎よりわずかに突出する。上顎の後端は眼の前縁と瞳孔の間の直下に位置する。前鼻孔は吻端直前に位置し、管状に伸びる。後鼻孔は眼の直前に位置し管状の皮弁をもたない。眼は大きく、頭高の43.3%で、円形。眼の上縁は頭部背縁よりわずかに膨らむ。背鰭直前域から頭部に鱗はみられない。体側の被鱗域前縁は鰓裂上端付近。腹鰭前方域にはわずかに被鱗域がある。第1背鰭起部は胸鰭基部後端の真上よりわずかに前方に位置し、第1背鰭棘長は第2棘で最長となり、最終棘(第6棘)で最短となる。第2背鰭起部は臀鰭起部の真上より前方に、第2背鰭基底後端は臀鰭基底後端よりわずかに後方に位置する。最長軟条は第3軟条で、以降は次第に短くなる。臀

鰭起部は第2背鰭第2軟条直下に位置する。最長軟条は第6軟条で、最短軟条は第1軟条である。胸鰭は縦に長い円形で、その後端は第2背鰭基底中央直下に達する。腹鰭は膜蓋と癒合膜により左右が結合した吸盤状で起部は頭部後端直下付近にあり、その畳んだ腹鰭の後端は臀鰭起部に達する。尾鰭は縦にやや長い円形。頭部の感覚管と孔器の状態をFig. 1BとCに示す。頭部感覚管は前眼肩甲管、後眼肩甲管、および前鰓蓋管をもち、B', C(S), D(S), E, F, G, H', K', L', M', N, O'が開口する。

色彩 生時の色彩—体は黒みを帯びた茶色を基調とし、第1背鰭起部直下、第2背鰭起部直下、第2背鰭基底中央部直下、尾柄部中央、および尾鰭基底直前に、体を横断する乳白色の横帯がある。その他、第1背鰭後半部と第2背鰭後半部直下には、側中線付近から腹中線にかけて乳白色

の横帯がある。吻部には眼の下部から口裂後端にかけて乳白色の横帯がある。

生鮮時の色彩 (Fig. 1A) — 本標本は麻酔の過程で体全体が黒化した。体全体は頭部を含め、暗い焦げ茶色。頭部、軀幹部、尾部における乳白色横帯は不明瞭だが、生時と同じ位置において、他の箇所よりわずかに明るく確認される。第1背鰭は赤みを帯びた暗い茶色を基調とし、第1棘から第3棘にかけて黒色斑がある。第1背鰭後縁は黄色みを帯びる。第2背鰭は暗い焦げ茶色を基調とし、上縁は茶色みがかった透明であり、さらにその内側は黄色みを帯びる。腹鰭、臀鰭は暗い焦げ茶色である。胸鰭は白色半透明である。尾鰭は黄色みをおびた褐色であり、基底部に黒色横帯がある。

分布 日本国外では、ミャンマー、タイ、パラオ、シンガポール、マレーシア、インドネシア、パプアニューギニア、ソロモン諸島、オーストラリア、および台湾から報告されている (Shibukawa et al., 2014; Li and Chen, 2025)。日本国内では、鹿児島県の屋久島、奄美大島、沖縄県の沖縄島、石垣島、西表島、与那国島からの記録がある (Shibukawa et al., 2014; 前田, 2017; 是枝ほか, 2026; 本研究)。

生息地の状況 河口からおよそ 300 m 上流に位置する感潮域上部のマングローブ帯の幅 2 m ほどの水路において、投棄されたコンテナの中から、干潮時に手網によって採集された。採集場所付近ではヒルギメナダ *Planiliza melinopterus* (Valenciennes, 1836)、ゴマフエダイ *Lutjanus argentimaculatus* (Forsskal, 1775)、ゴマアイゴ *Siganus guttatus* (Bloch, 1787)、コモチサヨリ *Zenarchopterus dunckeri* Mohr, 1926、ヤエヤマノコギリハゼ *Butis amboinensis* (Bleeker, 1853)、およびジャノメハゼ *Bostrychus sinensis* Lacepède, 1801 などが確認された。

備考 本標本は体高が高く体が側扁すること、頭部背面に皮褶をもたないこと、胸鰭軟条が遊離しないこと、頭部と背鰭直前域が無鱗であること、眼下に複数の横列孔器列がみられ (Fig. 1B)、両眼間隔域の感覚管開口 C(S) と D(S) の間を横切る孔器列があること (Fig. 1C)、体側に 7 本の乳白色の横帯がみられることが Shibukawa et al. (2014) と鈴木 (2021) による *Dotsugobius bleekeri* クマノコハゼの標徴および識別的特徴と一致したため、本種に同定された。

本標本は生時、眼下や体側に明瞭な横帯がみられたが、麻酔後に体色が一様に黒褐色へと変化し、横帯は不明瞭となった。固定後も、これらの横帯は不明瞭のままであった。本村 (2009) は麻酔によってヨシノボリ類の体色が黒く変色する事例を報告しており、同じハゼ類である本標本における変色も同様の現象であると考えられる。

本種は日本国内からの報告例に限られており、国内の生息状況に関する知見は乏しく、前田 (2017) では情報不

足とされている。石垣島では過去に大規模な魚類相調査が行われており、本標本が採集された名蔵湾周辺でも調査が行われているが、クマノコハゼは採集されなかった (林・伊藤, 1978; 林ほか, 1981; 神田ほか, 2009)。今回用いた標本は廃棄されたコンテナの中から得られたほか、屋久島では船溜まり内に沈んだロープに定位していた個体が採集されている (是枝ほか, 2026)。本種は自然下で岩の表面に定位する様子が観察されているほか (Shibukawa et al., 2014)、マクガイ *Isognomon ephippium* (Linnaeus, 1758) などの二枚貝類やそれらが付着している岩の隙間で採集されており (Li and Chen, 2025; 和田昇己氏, 私信)、立体的かつ複雑な構造物を好むと考えられる。本種の詳しい生息状況については記録が少なく不明とした前田 (2017) 以降、台湾 (Li and Chen, 2025) や屋久島 (是枝ほか, 2026)、石垣島 (本研究) など新生息地が報告されているものの、いまだ分布や生息環境、生息状況、既存産地間の交流の程度等についての知見は不足している。以上をふまえ、既知の生息地の保全を行うとともに、本種の分布、生息環境および生息状況の把握を進めることが望まれる。

謝 辞

本報告を行うにあたり、三重大学大学院生物資源学研究科名誉教授の木村清志博士には標本の登録において便宜を図っていただいた。また、三重大学大学院生物資源学研究科修士の久保敦暉氏と和田昇己氏には在学中に採集および採集時の輸送にご協力をいただいたほか、石垣島以外での本種の生息環境についての情報など、原稿に対して有意義なご助言をいただいた。神奈川県立生命の星・地球博物館の和田英敏博士には文献収集にご協力いただいた。また、匿名の査読者と Ichthy 編集委員の是枝伶旺博士には査読を通じて有益なご助言をいただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

引用文献

- 明仁親王. 1984. ハゼ垂目, pp. 228–229. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編) 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 林 公義・伊藤 孝. 1978. 南西諸島のハゼ科魚類について (I). 横須賀市博物館研究報告 (自然科学), 24: 59–82.
- 林 公義・鈴木寿之・伊藤 孝・瀬能 宏. 1981. 南西諸島のハゼ垂目魚類について (III). 横須賀市博物館研究報告 (自然科学), 28: 1–25.
- 神田 猛・上原 聡・澁野拓郎. 2009. 八重山諸島石垣島の陸水域魚類相. 宮崎大学農学部研究報告, 55: 13–24.
- 是枝伶旺・古橋龍星・米沢俊彦・本村浩之. 2026. 分布の北限記録を更新する宮崎県・鹿児島県産のカワクモハゼと鹿児島県産のクマノコハゼ. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 64: 1–10.
- Li, H.-E. and I.-S. Chen. 2025. First records of two brackish gobiid genera (Teleostei: Gobiidae) from Taiwan as their western Pacific distributional addenda. Zootaxa, 5738: 171–182.
- 前田 健. 2017. クマノコハゼ, p. 295. 改訂・沖縄県版レッドデータブック第3版改訂委員会 (編) 改訂・沖縄県の絶滅のおそれの

- ある野生生物（レッドデータおきなわ）第3版 動物編. 沖縄県環境部自然保護課自然保護班, 那覇.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Popta, C. M. L. 1921. Dritte fortsetzung der beschreibung von neuen fischarten der Sunda-Expedition. Zoologische Mededelingen (Leiden), 6: 203–214.
- Shibukawa, K., T. Suzuki and H. Senou. 2014. *Dotsugobius*, a new genus for *Lophogobius bleekeri* Popta, 1921 (Actinopterygii, Gobioidae), with re-description of the species. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A (Zoology), 40: 141–160.
- 鈴木寿之. 2021. クマノコハゼ, p. 477. 瀬能 宏 (監). 新版 日本のハゼ. 新訂・増補版. 平凡社, 東京.